工期「細部 分からぬ」

新国立 隈氏設計に

評価の差 質問相次ぐ

二〇二〇年東京五輪・パラリンピックの「顔」となる新国立競技場の計画案が二十二日、決まった。旧計画は工費などをめぐって迷走。仕切り直しとなった新計画の選考で、日本スポーツ振興センター（JSC）の幹部は記者会見で透明性を強調した。しかし、審査委員は採点の決め手となった工期の評価について、あいまいな説明を繰り返した。

（❶面参照）

「前回の反省を踏まえ、今回は出せる情報は積極的にオープンにすることで取り組んできた」。JSCの池田貴城理事は、この日東京都内で開いた記者会見で選定の透明性を強調した。

その直後、会見に同席した村上周三委員長は、審査内容に関する質問に「詳細は今回、オープンにしないと申し合わせている」と発言。審査委員会とJSCのチグハグぶりが目立った。

二案に対する項目ごとの七人の審査委員の総点数は公表されたが、審査委員ごとの点数は非公表。両案の完成時期は同じ二〇一九年十一月なのに、なぜ両案の採点に大きな開きが生じたのか。この点に報道陣の質問が集中した。村上委員長は「約束が守れるのか、実現可能性の評価で差がついた」との説明を繰り返したが、記者からは「その理由は？」「説明が分かりにくい」との声が相次いだ。

同席した別の審査委員からは「数字が分かりにくいと言われると確かにそう」と認める発言も。村上委員長は「細かいやりとりをしているので細部まで分からない」などと明言を避けたまま、一時間超に及ぶ会見は終わった。

会見後、報道陣に囲まれた村上委員長は「例えば準備工事や提案された新技術に不安要素があり、B案は工期が遅れるかもしれないと判断した」と、説明を少しだけ補足。審査内容の公表についても一転、「検討したい」と述べた。池田理事も「今後、審査内容は公表したい」と語り、会見場を後にした。

記者会見する（右から）建築家の隈研吾氏、杉谷文彦梓設計社長、山内隆司大成建設会長＝22日午後、東京都港区で

隈氏 環境に「負ける建築」志向

「建物の形ではなく、外苑の森と融合した建築であること。それが、日本らしさであり、レガシーになる」

新計画決定を受け、建築家の隈研吾さんは二十二日の記者会見に同席し、競技場の高さを抑え木材を活用するなど、明治神宮外苑地区の景観との調和に最も配慮したことを強調した。ひさし部分の裏側は木材を格子状に並べ、法隆寺の五重の塔を思わせる工夫を施した。

隈さんは木や竹、石などの自然素材を生かした日本的な表現が高い評価を受けてきた。建築思想の背景にあるのは、コンクリートで周辺環境を圧するような二十世紀型建築への反動だ。対極として、周辺環境との調和を試みる「負ける建築」を志向してきた。

近作の「浅草文化観光センター」（東京都台東区）は、ガラスの壁面に棒状の木材を並べた日本家屋の「連子窓」を思わせる、柔らかい表情が印象的だ。

一九五四年、横浜市に生まれた。六四年東京五輪当時は小学四年生で、丹下健三さん設計の代々木体育館に感動して建築家を志した。東京大大学院修了後、大手設計会社などを経て独立したが、バブル崩壊で都心での建設工事は激減。九〇年代後半は地方で仕事をし、地域の風土と向き合う重要性を知ったという。

中国の万里の長城近くで手掛けた「竹の家」は北京五輪のPR映像に使われ、海外での知名度を高めた。ほかに「根津美術館」（東京都港区）、「プザンソン芸術文化センター」（フランス）、五代目の「歌舞伎座」（東京都中央区）など。